

OCACCS 仮説と能格性

田 中 裕 幸

要 旨

他動詞の持つ格が与えられ得る位置に外項が基底生成されるとする OCACCS 仮説においては、その可能性が具現化したケースとして能格パターンが生成されるという可能性が強く示唆される。本稿では、対格言語と能格言語を区別するパラメータとして、*v* が持つ素性の多重性と、*v* の素性が誘発する操作の順序が重要な役割を果たす分析を提案する。また、そのパラメータの設定により能格性の基本的な特性群（形態的能格性・統語的能格性、反受動態の存在）が導き出されることも示す。

キーワード：能格性 (ergativity)、対格性 (accusativity)、動詞句構造 (*v*P structure)、素性の順序付け (feature ordering)、反受動態 (antipassive)

I 序

筆者は一連の研究において、対格付与子 (*v*) が外項を非対称的に *c* 統御する基底構造が普遍的であるという仮説 (OCACCS ; III 節参照) を立て、それが実現する例として、受動態一般や日本語の間接受動態、フランス語の使役構文に見られる外項への与格付与などの分析を行ってきた (田中 2016, 2017b; Tanaka 2018; 田中 2018)。外項 (基底の主語) が主格を付与され、内項 (基底の目的語) が対格を付与される典型的な「対格構文」以外の構文が、特殊な統語的条件が整った場合に限り派生され得ることが、自然な形で説明されると主張してきた。

一方、他動詞の持つ格が内項ではなく外項へ与えられることを容易にする OCACCS 仮説においては、「特殊な」条件下でなくとも外項に対する *v* の格付与が可能である言語が存在しても不思議ではない。本稿では、そのような言語がいわゆる能格言語（II 節）であるという可能性を探究し、その適切な分析に向けて、対格言語（III 節）と能格言語との間の可能なパラメータ（IV-1 節）を提案する。また、そのパラメータの設定により能格性の基本的な特性群（形態的能格性・統語的能格性（IV-2 節）、反受動態の存在（V 節））が導き出されることも示す。

II 能格性

能格性は格標示に関して世界の言語を二分する文法的差異の一つである。日本語（2）や英語のような「対格言語」においては、他動詞の主語と自動詞の主語が同じ格で標示され、他動詞の目的語は別の格で標示される。これに対してジルバル語（3）やバスク語等の「能格言語」においては、他動詞の目的語と自動詞の主語が同じ格で標示され、他動詞の主語は別の格で標示される。対格言語において他動詞の主語と自動詞の主語を標示する格を主格（nominative case; **NOM**）、他動詞の目的語を標示する格を対格（accusative case; **ACC**）、能格言語において他動詞の目的語と自動詞の主語を標示する格を絶対格（absolute case; **ABS**）、他動詞の主語を標示する格を能格（ergative case; **ERG**）と呼ぶ。

(1)

	他動詞主語	自動詞主語	他動詞目的語
対格言語	主格 (NOM)		対格 (ACC)
能格言語	能格 (ERG)	絶対格 (ABS)	

(2) a. 子どもが (**NOM**) 水を (**ACC**) 飲んだ。

b. 子どもが (**NOM**) 起きた。

(3) (Dyrbal; Dixon 1994: 10)

- a. *ɲuma-∅ yabu-ɲgu bura-n* ‘Mother saw father.’
 father-ABS mother-ERG see-NONFUT
- b. *ɲuma-∅ banaga-n^yu* ‘Father returned.’
 father-ABS return-NONFUT

統語理論においてこの言語間の差異をどう捉えるかは非常に重要な問題であり、多くの分析が提案されてきた。次節以降では、格付与子が自身の *c* 統御領域にある最も近い名詞句に格を与えるという、古典的かつ単純な格理論を前提として、この問題を OCACCS 仮説の下で分析する方法を提案する。

III OCACCS と対格性

本節では、次節での能格性の分析において重要な役割を果たす動詞句の構造についての仮説を導入する。Hale and Keyser (1993) および Chomsky (1995) 以来、標準的に採用されている他動詞文の動詞句構造は (4) であり、主語 (外項) は多重動詞句構造の最上位の主要部 *v* の指定部に基底生成される。*v* は格付与子であり、一般に格付与子はその *c* 統御領域内にある、まだ格を与えられていない名詞句のうち、最も近いものに格を与えることで自身の格素性を満足させるとすると、(4) において *v* はその *c* 統御領域内の唯一の名詞句である目的語に格を付与せざるを得ない。主語は *v* に *c* 統御されないため、*v* による格付与の対象にはならない。

- (4) [_{NP} 主語 *v* |Case| [_{VP} V 目的語]]

これに対して、本稿では (5) を仮定する。

- (5) OCACCS (The Object Case Assigner C-Commands the Subject)
- a. 動詞の項は全て VP 内に基底生成される。
 - b. *v* は EPP 素性を持つ。

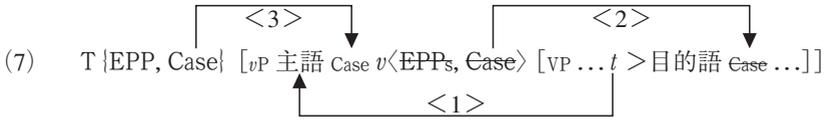
(5) の下では (4) に対応する構造は (6) のようになる。(5a) によれば、*v* は項を取らず、主語 (外項) は VP 内に基底生成される。つまり、*v* は目的語 (内項) のみならず主語をも *c* 統御する形になる。(以後、「 $\alpha > \beta$ 」は α が β を非対称的に *c* 統御することを表す。)¹⁾

(6) [_{vP} *v* <EPP_s, Case> [VP 主語 > 目的語]]

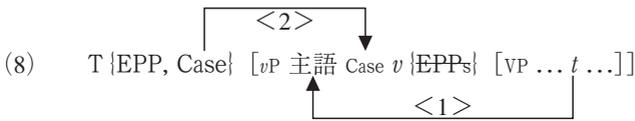
(5b) の EPP 素性はいわゆる A 移動を駆動するもので、A バー移動を駆動する *v* (およびその他のフェーズ主要部) の素性 (Chomsky (2000) における P-feature) とは区別する。また、この EPP 素性はちょうど一つの名詞句を指定部に牽引することにより満たされると仮定し、このことを明示するために以下ではこの素性を「EPP_s」(s: single) と表記する。

v は、それが結びつけられる動詞が他動詞の時は格付与能力を持ち、自動詞の時は格付与能力を持たない²⁾。(6) は他動詞句であるので *v* は格付与能力を持ち、また、(5b) に従い EPP 素性を持つ。格付与能力がある場合、*v* は格付与と EPP 素性による牽引 (EPP 牽引) の二つの操作を行う必要があり、操作の順序として EPP 牽引を先に行う場合と格付与を先に行う場合の二つが考えられる。仮に EPP 牽引が先に起こった場合 (7)、*v* から見て最も近い位置にある主語が *vP* 指定部に引き上げられて EPP 素性が満たされる。(最小性原理により目的語は引き上げられない。) その後 *v* が目的語に対格を与える。(外項の痕跡は格付与の妨げにならない。) ここで定形の T が *vP* を補部を取れば、その T が主語に主格を与える。このように、格付与より先に EPP 素性によって主語が *vP* 指定部に引き上げられれば、派生は収束し、能動態他動詞構文 (例えば *Pat plays the ballad.*) が得られる。

- 1) θ 階層と UTAH (Baker 1988) に従って主語が目的語を非対称的に *c* 統御している点を除き、VP 内部の構造は以降の議論に無関係である。
- 2) 自動詞の中でも非能格動詞は統語上は他動詞と同じであるという Hale and Keyser (1993) の提案を踏襲するが、英語の同族目的語等の場合を除いて、通常、この格は音形を持つ名詞句に義務的に与えられるものではない。

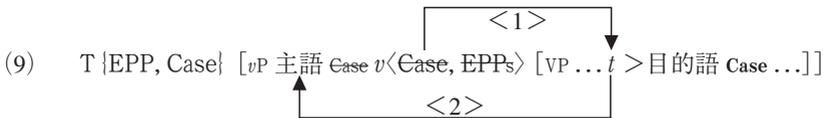


自動詞文の場合は、*v* が格を持たないので、主語（唯一項）が *v* の EPP 素性により *v*P 指定部に引き上げられ、T に格を付与される。



このように、上記の条件下では他動詞の主語と自動詞の主語に T の格が、他動詞の目的語に *v* の格が与えられるため、対格的な格配列が生成される。

(7) の派生では、主語が *v*P 指定部に引き上げられた時点で、(統語操作上無視される) 外項の痕跡が VP 内に残るという点を除いては (4) と同じ *v*P 構造が得られる。この限りにおいて、標準的な動詞句 (4) と OCACCS に基づく (6) の間に違いはない。しかし、EPP 牽引より先に格付与が起る可能性も論理的にはあり、外項の基底生成位置が *v* に *c* 統御されると仮定することが意味を持つのはこの点においてである。ただし、(6) を起点とした場合、この順序では派生は収束しない。(6) を起点として格付与の後に EPP 牽引を行った派生を (9) に示す。(この順序を *v*<Case, EPPs> で明示する。)



(9) で EPP 牽引の前に格付与を行う場合、主語が *v* から最も近い名詞句

であるため、主語に対して格が付与される。その後 *v* が EPP を満たすために指定部に引き上げる対象も (*v* から最も近い) 主語であるため、二つの操作が終わった後には、格付与された状態の主語が *v*P 指定部に、格付与されていない状態の目的語が基底生成位置に存在することになる。目的語は既に満たされた *v* の EPP 素性により上位のフェーズに引き上げられることはないため、フェーズ不可侵条件 (Phase Impenetrability Condition; Chomsky (2000)) により、*v*P 外部の格付与子から格を付与される可能性もなく、格が付与されないために派生は破綻する。

仮に (6)/(9) で *v* が主語に、T が目的語に格付与することができ、自動詞文においては (8) と同様に T が自動詞の主語に格付与するとすれば、他動詞の目的語と自動詞の主語に同じ格が付与される能格パターンが生成されるはずである。しかし、今見たように、(6)/(9) の条件下では *v* が主語に格付与して派生が収束する可能性はなく、能格パターンを生成することができない。本稿ではこの条件が成り立つのが対格言語であると考ええる。

この論理的帰結として、*v* が他動詞の主語に格を付与できる場合があるとすれば、それは (6)/(9) で表された何らかの条件が成り立たない場合であると言える。そのような例の一つとして、田中 (2017b) では受動文を取り上げた。この分析では (6)/(9) の「主語」が Baker et al. (1989) の主張するように接語 (clitic) であり、通常の名詞句ではないという意味で条件が異なる (V 節を参照)。これとは別の可能性として、主語・目的語は通常の名詞句であるが、*v* の持つ素性の属性が (6)/(9) とは異なる場合が考えられる。次節では、そのような設定が具現化されたのが能格言語であると提案する。

IV 能格性の導出

1. 能格性を生み出す *v*

前節で見たように、(5) の下で (6)/(9) から能格パターンが派生され得ないのは、他動詞主語に *v* から格を与えた場合、目的語が格を付与されない

まま VP の中に取り残され、PIC により、*vP* フェーズ外の格付与子 (T) からの格付与も受けられないからである。このことを保証するのは、(5b) で措定される *v* の EPP 素性が、一つの名詞句しか牽引できないという仮定である。仮に EPP 素性が複数の名詞句を牽引することができれば、主語だけでなく目的語も *vP* 指定部、つまり外部の格付与子からアクセスできる領域に移動することができ、収束する可能性が出てくる。

そこで、*v* の EPP 素性には、単一の名詞句しか牽引できないものに加えて、任意の数の名詞句を牽引できるものがあると仮定する。前者を前節から引き続き EPP_s と呼び、それに対して後者を「EPP_m」(m: multiple) と呼ぶことにする。基本的に対格言語の *v* は EPP_s を持ち、能格言語の *v* は EPP_m を持つと仮定する。ただし、各々の能格言語においても様々な条件により対格パターンが表出する場合があることから、EPP_s と EPP_m の違いは言語間のパラメータというよりは *v* という語彙項目が持つ属性であると理解すべきである。

また、一般的に一つの主要部が持つ複数の素性の間には、それが駆動する操作の間に順序を付けることができると考える。*v* については、対格言語においては EPP_s による牽引の後に格付与が起こり、能格言語においては格付与の後に EPP_m による牽引が起こると仮定する。前節に倣い、前者を〈EPP_s, Case〉、後者を〈Case, EPP_m〉と表す。

以上を仮定すると、能格言語の *vP* 構造は以下のようになる。



まず、*v* の格素性が最も近い主語に与えられる。次に EPP_m により、主語、目的語がこの順で検出され、*v* の指定部に引き上げられる。同一の EPP 素性が複数の名詞句を牽引する場合は、それらの *c* 統御関係を保ったまま多重

指定部を作るとする (Richards 1999)。この時点で主語は既に格を付与されており、目的語は格を付与されていないが *v*P 指定部 (フェーズのエッジ) に位置し、T からの探査で検出され得る領域にある。

この後、目的語が T から首尾よく格を付与されれば、派生は収束する。その方法は次節で詳しく見るが、その前に (10) で示された派生以外の派生が起こる可能性について考察しておく。まず、上で導入した素性間の順序づけにより、EPP 牽引が格素性より先に起こる可能性はない。(5a) の仮定を採り、かつ格付与が EPP 牽引より先に起こるとすることで、*v* の格 (つまり能格) が主語に与えられることが保証される。次に、EPP_m は単独の名詞句を牽引することもできるが、仮にここで主語だけを牽引したとすると、目的語が格を付与されないまま VP 内に取り残されて派生は破綻する。従って、主語と目的語の両方を牽引する場合のみが派生の収束につながることになる。

2. 形態的能格性と統語的能格性

ここで、定形節の T については以下の 2 種類があると仮定する。

- (11) a. T<Case, EPP>
b. T(Case, EPP)

(11a) は前述の *v* と同様、格付与の次に EPP 素性による牽引を行う T である。(11b) は格素性と EPP 素性が束 (bundle) になって一つの探査子となり、同時に両素性の充足を行う性質を持つ T である。対格言語の (7) の *v*P を補部に持つ T としては、(11a)、(11b) のどちらの T が現れても派生は収束する。(11a) が現れた場合は、まず *v*P 指定部の主語に格を付与し、その後に EPP 素性が主語を TP 指定部に引き上げる。(11b) が現れた場合は、上記の二つの操作が同時に行われる。いずれの場合も主語に主格が与えられて派生は収束する。

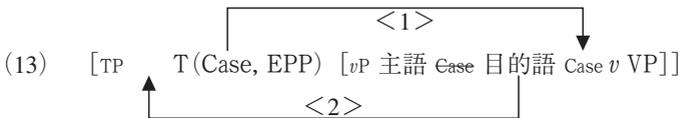
それでは能格言語において (10) が派生された後、それぞれの T が導入

された場合に何が起ころうか。(11a) が導入された場合の派生は (12) のようになる。



T が導入された後、まず格付与が先行して起ころ。主語が目的語を非対称的に c 統御しているの、T から見て主語の方が目的語より近いことになるが、主語は既に格を付与されているので格素性は見えない状態にあり、結果としてまだ格を付与されていない目的語に格付与がなされる。次に T の EPP 素性が探査するが、EPP 素性は格素性が可視的かどうかに関わらず最も近い名詞句を検出するので、主語がその対象となり、TP 指定部に牽引される。

次に、(11b) が導入された場合の派生は (13) のようになる。



この場合は T の格素性と EPP 素性が束になっているので、両方の素性を持つ名詞句を求めて探査を行う。最も近い主語の格素性は不可視であるので、次に近く、両方の素性を持っている目的語が選ばれる。ここで格付与と EPP 牽引が同時に行われ、目的語が TP 指定部に引き上げられる。

(12)、(13) いずれの派生においても、主語が *v* により能格を、目的語が T により絶対格を与えられることから、能格主語・絶対格目的語の格配列を生成する。一方で、(12) では主語が EPP 牽引の対象になるのに対して、(13) では目的語が EPP 牽引の対象になる。この違いが、いわゆる統語的能

格性の有無を生み出す要因であると提案する。よく知られているように、格標示という形態的観点において能格性を示す言語の中でも、統語的には他動詞の主語が自動詞の主語と同様に主語性を示す対格的な言語と、他動詞の目的語が主語性を示す能格的な言語とがある。例えば従属節の音形を持たない主語をコントロールする能力は主語性の一つとされる。ウォルピリ語もジルバル語も形態的能格性を示すが、ウォルピリ語では（英語や日本語等の対格言語と同じく）他動詞の主語がこの能力を持つものに対して、ジルバル語では他動詞の目的語がこの能力を持つ。

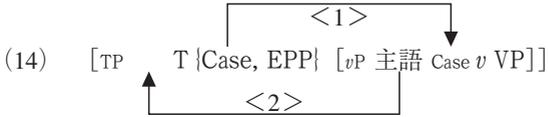
T の EPP 素性による牽引の対象になった名詞句が、従属節の音形を持たない主語をコントロールする能力を持つと仮定すれば、(12) では主語が、(13) では目的語がその能力を持つことになる。このようにして、形態論上は能格的である言語の中でも、統語論上も能格的である言語とそうでない言語との違いを捉えることができる³⁾。

主語性の中でも、主語指向性を持つ再帰代名詞を束縛する能力は、統語的能格性を示す言語でも他動詞の主語にあることが報告されている。OCACCS の枠組みでは、この事実は、最初に *v* の EPP 牽引の対象となった名詞句が再帰代名詞を束縛する能力を持つと仮定することで説明できる (cf. Saito 2009)。対格言語の他動詞文においては他動詞の主語が唯一、*v* の EPP 素性により牽引されるため (7)、この主語が再帰代名詞を束縛する能力を持つ。能格言語においては *v* が EPP_m を持つため、主語と目的語の両方が牽引の対象となるが、探査において最初に検出されるのは主語であるため、主語が再帰代名詞束縛の能力を有すると考える。

最後に自動詞構文の派生について述べておく。VP 内に基底生成される名詞句が一つのみであり、*v* も格を持たないため (注 2)、対格言語においても能格言語においても、*v* が実質的に EPP 素性のみを持ち、それが VP 内の唯

3) Ura (2000) は、機能範疇との素性照合関係が名詞句の主語性を決定するというアプローチの下、能格言語間の主語性のバリエーションについての精緻な分析を提示している。

一項を *v*P 指定部に牽引する⁴⁾。



この後 T<Case, EPP> が導入された場合、T が *v*P 指定部にある主語に格を与え、次に EPP 素性により主語を TP 指定部に牽引する。T (Case, EPP) が導入された場合も、T による格付与と EPP 牽引が同時に行われるという点以外では同じである。いずれの場合も唯一項が T の格（主格ないし絶対格）を与えられ、派生は収束する。

本節の分析をまとめると、表 (15) のように、*v* が持つ EPP 素性の多重性 (s/m) および EPP 牽引と格付与の順序により、対格言語か能格言語かが決まる。更に、T の素性照合の順序付けの違いにより、能格言語が統語的能格性を持つか否かが決まる。

(15)

	T<Case, EPP>	T (Case, EPP)
<i>v</i> <EPPs, Case>	対格言語	
<i>v</i> <Case, EPP _m >	統語的能格性を持たない能格言語	統語的能格性を持つ能格言語

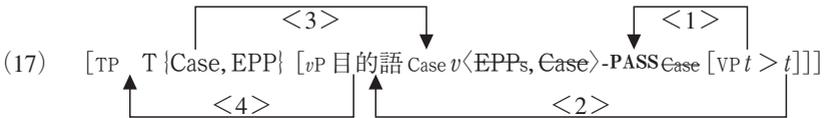
V 受動態と反受動態

対格言語の受動態 (16b) では、他動詞の目的語（内項）が主格を付与され、他動詞の主語（外項）は斜格（英語では *by* 前置詞句）に「降格」する。

4) (14) では T<Case, EPP> と T (Case, EPP) の区別を捨象して T {Case, EPP} と表記している。

- (16) a. She(**NOM**) criticized them(**ACC**).
 b. They(**NOM**) were criticized(**PASS**) **by** her.

田中 (2017b)、Tanaka (2018) では、OCACCS の利点として、外項そのものが受動形態素 (**PASS**) であり、それが他動詞が本来持つ対格を「吸収」という Baker et al. (1989) の分析を、下方移動などの望ましくない操作に頼らずに理論化することができるかと主張した。統語的には *v* に対する接語である受動形態素が、直ぐ上の *v* に接語化することで、*v* の格素性を充足する。さらに、この移動によって内項が *v* の EPP 素性の牽引の対象になり、*vP* 指定部に引き上げられる。引き上げられた内項は T により格付与を受ける。



能格言語の中でも受動態を持つものがあるが、基本的に同じ派生を辿ると考えてよい。能格言語では *v* の格付与が EPP 牽引よりも先に起こるという点で対格言語とは異なるが、受動形態素によって *v* の格素性が先に満たされてしまうので、結果として (17) と同じ状況に至る。

以上の受動態の分析に則って、能格言語一般が持つ反受動態 (antipassive) の派生を考える。受動態では外項が降格するが、反受動態では内項が降格する。(18a) はジルバル語における能動態他動詞構文であり、外項が能格、内項が絶対格で標示される。それに対して反受動態 (18b) では、外項が絶対格で標示され、内項は与格 (dative; **DAT**) に降格している。また、動詞には反受動態形態素 (**APASS**) が付加されている。

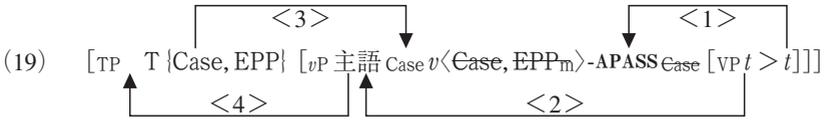
- (18) (Dyrbal; Dixon 1994: 10, 13)

- a. yabu- \emptyset μ ma- μ gu bura-n ‘Father saw mother.’
 mother-ABS father-ERG see-NONFUT
- b. μ ma- \emptyset bural- μ a-n^yu yabu-gu ‘Father saw mother.’
 father-ABS see-APASS-NONFUT mother-DAT

Baker et al. (1989) のアプローチに沿って、反受動態形態素も、受動態形態素と同様に統語的には接語である項であるという仮定を採る。上述のように能格言語の中には受動態も反受動態も持ち合わせている言語があり、そのような言語では二つの構文は異なる形態素が動詞に付加することにより区別される。受動態形態素は外的 θ 役割、反受動態形態素は内的 θ 役割にそれぞれ特化した要素であると仮定する⁵⁾。ただし、対格言語においては受動態は存在するが反受動態は存在せず、能格言語においては受動態も反受動態も存在し得るという事実は、単に対格言語が内的 θ 役割を持つことを指定された形態素を持たないとするだけでは、十分に説明されたとは言えない。対格性と特定の語彙項目の欠落が偶然に相関していると主張することになるからである。反受動態形態素は論理的にはどの言語でも持ち得るが、各言語の統語的な特性の帰結として反受動態の派生が許されるかどうかが決まるという説明がなされなければならない。

反受動態文の派生は (19) のように進むと考える。まず、反受動態形態素 APASS が内項として基底生成される。外項と v (Case, EPP_m) が導入された後、 v への接語である APASS が v に付加し、 v と APASS の格素性が満たされる。その後、VP 内に唯一残された外項が v の EPP_m により引き上げられ、T により絶対格の付与と EPP 素性による牽引を受け、派生が収束する。

5) 基本的に、どのような特性を持った名詞句がどの θ 役割が与えられる位置に導入されてもよく、その後の派生が収束するかどうかによってその可否が決められるはずであるが、接辞に関してはその項目自体の属性として、外項・内項の別が指定され得ると考える。これは、例えば英語において派生接辞 *-er* が外項を、*-ee* が内項を表すように指定されているのと同様である。

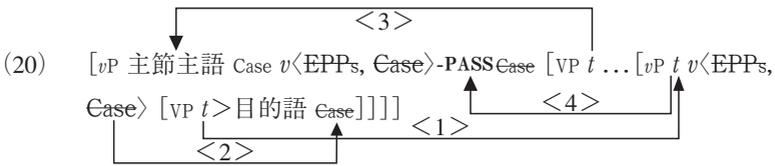


この分析では APASS が *v* に接語化して格を吸収した時点で、受動態の派生と実質的に同じ状況が出来上がる。*v* の EPP 素性と、格付与されていない項が一つ残されるという点で、前節の自動詞構文の派生の基底構造と相違はなく、この意味で受動態も反受動態も他動詞を「自動詞化」する操作と見做すことができる。

(19) では APASS が外項を飛び越えて移動しているが、接語のホストに対する付加は接語自身の要求による移動であるので (Tanaka 1998; 田中 2017a)、問題はない。例えば *v* の EPP 素性が牽引する対象を探索する時は、名詞句を探すので、外項・内項の二つの名詞句が存在する場合は、*v* から見て最も近い名詞句として外項が内項よりも優先して選ばれるが、APASS は *v* を探して最も近い *v* に付加しようとするので、その間に他の名詞句が介在するかどうかは無関係である。

ただし、このままでは対格言語においても同様に内項として APASS を導入して反受動態文を生成することを阻止できない。また、これとは独立してはいるが関連のある問題として、接語化のタイミングの問題がある。仮に (20) のように、対格言語の受動文が ECM 補文として埋め込まれているとしよう。(17) では PASS が *v* による EPP 牽引や格付与よりも先に *v* に付加するが、この接語化の前に EPP 牽引が起こることができると仮定すると、EPP 牽引の対象となるのは最も近い名詞句である PASS である。従って PASS が *v*P 指定部に引き上げられてしまい、ここからは *v* を非対称的に *c* 統御するため、*v* に付加することができなくなる。しかし、その後 *v* が内項に格を与え、ECM 動詞の *v*P 構造が組み上げられると、PASS の付加する対象として主節の *v* が現れる。ここでも *v* に対する接語化よりも前に EPP 牽引が起こることが許されるならば、ECM 動詞の外項が *v*P 指定部に引き上げられ、

その後 **PASS** が *v* に付加して格を吸収する。最後に ECM 動詞の外項が主節の T から格付与され、EPP 牽引を受ければ、(21) のように主節の外項が主語となり、主節動詞が受動化され、補文の外項が降格される文が派生されるはずである。他の名詞句ではなく **PASS** が上位節に繰り上がるという意味で「超受動態 (hyper-passive)」とでも呼ぶべき構文であるが、このような構文は全く観察されないことから、この派生を阻止する手段が必要である。



- (21) *John is believed to love opera (by Bill).
 (int. 'John believes Bill to love opera.')

超受動態が存在しないこと、および対格言語に反受動態が存在しないことを保証する手段として、(22) を提案する。

- (22) *X* を任意の統語範疇、*CL* を主要部 X^0 に対する接語とする。
- CL* は、それを *c* 統御する最も近い X^0 に付加しなければならない。
 - X^0 に対する付加操作は、 X^0 の素性を探索子とする操作に先行する。
 - CL* は、 X^0 の EPP 素性により牽引され得る領域から X^0 に付加しなければならない。

(22b) は主要部に対する付加操作が、その主要部の素性が誘発する操作に先んじて行われるという統語演算の一般的性質に関する仮説である⁶⁾。PASS、

APASSは統語範疇 v に対する接語であるので、(22)に従えば、これらは、自身を c 統御する最初の v が導入された後、その v に (22a)、 v による EPP 牽引や格付与の操作よりも前に (22b)、付加しなければならないことになる。(20)では、埋め込み節の v が導入された直後に PASS は v に付加しなければならない。従ってこの付加より前に EPP 牽引が起こる (20) の派生は不可能である。それに対して受動態 (17)、反受動態 (19) の派生では、(22a)、(22b) に従い、 v による EPP 牽引の前に v への付加が起こっている。

最後に、対格言語に反受動態が存在しないことが (22) から導き出されるということを見ておく。本稿の枠組みでは対格言語の v は EPP_s を、能格言語の v は EPP_m を持つ。仮に対格言語の他動詞の内項に APASS を基底生成したとすると、 v が導入された時点の構造は (23) のようになる。

(23) [vP v ⟨EPP_s, Case⟩ [VP 主語 Case > APASS_{Case}]]

(22a)・(22b)により、APASSは次に v が EPP 牽引を行う前に v に付加しなければならない。しかし、(22c)により、付加を行う際は APASS は v の素性から検出され得る位置になければならない。ところが v の EPP 素性は単一の名詞句しか引き上げられない EPP_s であるため、内項である APASS は v の EPP 素性により引き上げられる可能性はない。従って (22c) により、この付加操作は行えない。移動先 (22a) とタイミング (22b) に関する条件と、移動元 (22c) に関する条件を同時に満たす可能性がないため、この派生はこの時点で停止されると考える。

一方、能格言語における反受動態の派生 (19) をもう一度見ると、 v の持つ EPP 素性が任意の数の名詞句を牽引できる EPP_m であるので、内項として生成された APASS もその牽引の潜在的対象になる。従って、(22c) を満たすため、EPP により主語が引き上げられる前に v に付加することができ

6) 最大投射であると同時に主要部でもある接語の移動のみならず、主要部移動一般が (22b) に従うかどうかは今後の検証に委ねる。

る。以上のように、受動態も反受動態も統語的には同じ性質を持った接語であり、接語一般が (22) の制約に従うと仮定すれば、 v が EPP_s を持つか EPP_m を持つかという能格言語と対格言語を区別するパラメータそのものから、対格言語が反受動態を欠くという事実を導出することができる。

VI 結語

本稿では、 v が外項に格を与え得るとする OCACCS 仮説の下で能格性の基本的性質を導出する方法を提示した。中核となるのは (15) に示された v と T の素性に関するパラメータである。特に v が任意の数の名詞句を牽引できる EPP 素性を持つかどうか、そして格付与が EPP 牽引に先行するかどうかを能格言語を対格言語から区別する重要な要因である。

本稿で導入した素性に関する諸々のメカニズム（個々の素性の多重性、素性間の順序付け）および接語に関する仮定 (22) が独立したサポートを得られるかどうかは、今後の課題である。一方で、この枠組みで措定した素性の多重性や順序付けといったメカニズムについて、(15) に示されたもの以外にも論理的には様々な組合せが考えられる。さらに、本稿では EPP 素性と格素性の兼ね合いのみを考察の対象としたが、これに一致を司る ϕ 素性を加えると、組合せが一気に増大する。可能な組合せのうち、派生が収束しないものについてはなぜ収束しないのか考察することで、普遍的な統語演算の性質に対する示唆が得られるかもしれない。また、派生が収束するものについては、それが実際に見られるどの言語のどの構文なのか、体系的に検討する余地がある。例えば格は能格的であるが一致は対格的であるような分裂能格性を示す言語も存在し、そのような言語においては格素性より後に ϕ 素性が一致操作を誘発する T が存在する可能性が考えられる。通言語的に十分なバリエーションを許す一方で、実際に見られない表現群が過剰生成されないよう、制約を課すことのできる体系の構築が求められる。

（筆者は関西学院大学商学部教授）

参考文献

- Baker, Mark. 1988. *Incorporation: A theory of grammatical function changing*. Chicago: University of Chicago Press.
- Baker, Mark, Kyle Johnson, and Ian Roberts. 1989. Passive arguments raised. *Linguistic Inquiry* 20: 219-251.
- Chomsky, Noam. 1995. Categories and transformations. In *The minimalist program*, 219-394. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2000. Minimalist inquiries: The framework. In *Step by step: Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, ed. Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89-155. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Hale, Kenneth, and Samuel J. Keyser. 1993. On argument structure and the lexical expression of syntactic relations. In *The view from Building 20: Essays in linguistics in honor of Sylvain Bromberger*, ed. Kenneth Hale and Samuel J. Keyser, 53-109. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Richards, Norvin. 1999. Featural cyclicity and the ordering of multiple specifiers. In *Working minimalism*, ed. Samuel D. Epstein and Norbert Hornstein, 127-158. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Saito, Mamoru. 2009. Optional A-scrambling. In *Japanese/Korean Linguistics 16*, ed. Yukinori Takubo, Tomohide Kinuhata, Szymon Grzelak, and Kayo Nagai, 44-63. Stanford: CSLI.
- Tanaka, Hiroyuki. 1998. The “avoid embedding” condition and the checker/checkee asymmetry. *English Linguistics* 15: 281-289.
- Tanaka, Hiroyuki. 2018. The derivation of passives and the height of *v* relative to the external argument. Paper presented at the 92nd Annual Meeting of the Linguistic Society of America.
- Ura, Hiroyuki. 2000. *Checking theory and grammatical functions in Universal Grammar*. New York: Oxford University Press.
- 田中裕幸 (2016) 「フランス語における *Faire*-不定詞使役構文と OCACCS 仮説」『商学論究』第63巻第4号, 79-93頁, 関西学院大学商学研究会.
- 田中裕幸 (2017a) 「素性循環性と照合子・被照合子間の非対称性」『商学論究』第64巻第6号, 75-88頁, 関西学院大学商学研究会.
- 田中裕幸 (2017b) 「対格付与子と外項基底生成位置の相対的な高さについて—受動態を中心に」『関西英文学研究』第10号, 33-40頁.
- 田中裕幸 (2018) 「与格名詞句としての PRO」『言語と文化』第13号, 29-43頁, 関西学院大学言語教育研究センター.